

# 鴻 koh

月刊俳句誌

令和3年9月1日発行

(毎月1回1日発行)

第16巻第9号 通巻183号

9 月号

2021



稿継がな麦生の風の明るさよ

切株に木耳の生え雨季がくる

登四郎の地よ蟻蠓のここかしこ

とんぼうの羽化が棚田の水田べり

日溜りの菖蒲田にある風の息

一音しか出せぬ草笛吹く今宵

草鉄砲打たうか青き蘆原へ

影持たぬとうすみ蜻蛉独歩の忌

仏法僧の声かも奥の尼寺に

心音となるまで座せる瀧の前

みんなの声が地蔵の声となる

二番蚕に過不足のなき雨の音

土用太郎小牡鹿は黙通しけり

# 稿継がな

主宰作品

増成栗人

# 詩 作品抄

矢倉より吹く風朱夏の切通し 鈴木 崇

太宰の忌藻畳に雨強くなる 北村 操

でで虫に大きな空のありにけり 山岸 明子

薔薇百花いちにち虻を遊ばせて 坂入喜代枝

髪型を変へて私の夏が来る 北城 美佐

卯の花腐し書棚の整理しなければ 佐藤あさ子

風五月籠の鸚鵡に迎へらる 中島 宙

万華鏡くるくる八十八夜かな 井上つぐみ

ソーダ水優しき嘘を聞いてをり 菊池ひろ子

消えやすき水輪が一つあめんぼう 藤原 明美

増成栗人 選

十葉の香は裏道といふ証し 小林 和子

小鼓の囃子の調べ夏兆す 伊藤 隆

モーターアルトバッハ音楽堂に夏 神野未友紀

草いきれして羽前へと続く道 西條 弘子

緑蔭にどつぷりひたるカフェテラス 伊藤 啓泉

箸置きを硝子に替へて更衣 綾戸五十枝

レトルトのカレーの昼餉走り梅雨 青木まゆみ

薄く切る赤玉チーズ梅雨に入る 美濃 律子

取り敢へずパレットに青夏来たる 山田ゆきこ

不器用に生き真四角な冷奴 守屋久江

「萩」は、秋の七草の筆頭で、鹿鳴草、鹿妻草、鹿の妻、玉見草、庭見草、初見草、古枝草、男草、諸味草、野守草、胡枝子、天竺花、随軍茶、芽子花、芳宜艸と別称の多いこと、驚くほどである。これは萩が、古来より愛されてきた証。『万葉集』でも一番多く詠まれている花である。

秋の植物の代表の意味で、秋の字に草冠をつける「萩」という字は日本でできた文字である。

白萩を潜り戸とせむ屋敷神

鴻司

# 萩

## 特集



### 俳句に詠まれた萩

林 未生

秋の七草の第一番に名あがる「萩」は灌木であり草ではない。日本人に風情を愛されてきた萩は万葉集では花の王者である。近年は桜などに人々の関心が移っても俳句での人気は根強い。種類は多いが普通ヤマハギ、ミヤギノハギを指す。盗人萩はヌスビトハギ属の多年草。

萩の風何か急かる何ならむ

水原秋櫻子

夢すすき萩まんじゆさげ雨しとど

増成栗人

萩咲くや伎芸天女に逢ひにゆく

谷口摩耶

戒壇の漆黒を抜け萩の風

石田蓉子

夏萩の道もどり来て又雨に

森多 歩

萩よりも盗つ人萩の盛んなる

半谷洋子

萩は乱れていたり零れていたりする方が風情があり俳人の好むところである。私がよく行く郊外の水車小屋に覆いかぶさるように萩が生えている。それはそれは生命力が旺盛で今にも飲み込まれそうである。これが本来の萩の姿ではないかと思う。

ゆつくりと歩かう萩がこぼれる

山頭火

もとよりの風のぶくらみ括り萩

後藤兼志

水の面に届かぬ白きこぼれ萩

岩崎 俊

萩刈つて桂郎忌まで焚かずおく

神蔵 器

振り返る野麦峠の乱れ萩

斎藤利雄

さみだれ萩とふ名のやさし紅紫  
いつ刈ると問はるる萩を不憫とす  
萩には月がよく似合う。

細見綾子  
後藤夜半

一つ家に遊女も寝たり萩と月

芭蕉

月影を集めてゐたるこぼれ萩

荒川心星

木道の少し濡れたる萩月夜

伊藤 隆

屋よりも白きうねりの萩月夜

鷹羽狩行

萩の寺で私はず思ひ出すのは、奈良の百毫寺の山門から続く石段になだれる萩である。

良寛のごときが遊ぶ萩の寺

増成淡紅子

萩寺といはれて掃かず萩の花

上木流泉

萩焼は柔らかかで素朴な風合いがあり、長年使い続けると色彩が変化し、その景色の美しさが見所となる。

萩焼の糸尻高き新茶かな

岡田久慧

妻は志野吾は萩焼笹子飛ぶ

大岳水一路

お彼岸のおはぎは、春は牡丹の花にちなんでばたもち(牡丹餅)、秋は粒あんの小豆を萩の花にみたてておはぎ(お萩)というが、季語ではない。

菓子ぶりの小さなおはぎ春の風邪

鍵和田柚子

子祭りや寝て待てばばたもちが来る

一茶

ぼた餅の昼夜を分つ彼岸かな

正岡子規

他に萩にはこんな句も

古九谷に萩の酒とは忝な

大石悦子

萩刈つて土のせみしせ見せにけり

関戸靖子

半谷洋子

作者は「泉」同人、『聲』主宰。二〇〇九年八月逝去、享年七十八。掲句は第四句集『紺』の中に収められたもの。

萩の七草の一つの萩は、万葉集の時代からよく詠まれ、日本人に愛されてきた。花の終った萩は、根元から切り口を揃えてきれいに刈られてしまう。萩叢が刈られた後には、枝葉で覆われ隠れていた地面が顔を出す。華やかに咲いていた頃の景とは対照的な、あつげらかと寂しい景。作者は現れた土を「土のさみしさ」と詠んでいる。刈られてしまうと、土の上に見えるのは僅かばかりの丈で切り揃えられた細い棒のような集まり。季節が巡ればまた芽吹き、柔らかな若葉が出てくると分かっている。その変化の大きさを目の当りにすると、しみじみ寂し

「萩」

特集

## 萩の一句

「萩」を詠んだ自分の俳句、または「萩」が詠まれた愛誦の句と、その句についてのエピソードや、俳句のなかでの「萩」について語っていただきました。

い。しかし、根株だけになってしまった風情も、また違った味わいをもたらしてくれる。  
さらりと詠まれた句が静かに心に染み透る。

亡き人へ嫁姑いせせか萩持る

鈴木真砂女

森 祐司

真砂女が楽天家で、土性骨の強い女性だったことは確かだろう。だから、不倫とはいえ、その愛情を信じ、夫婦でないことを少しも気に病むことはなかったと言っている。

だが、ある葬儀で、一つの墓に夫婦の遺骨の納められていくのを見つけた時、世に認められた結婚というものの凄味を知ったのである。夫婦は死後も一緒なのだ。自分の所に、結局は帰ってくると思っていた亡き人が、今や本妻と仲よく墓に納まっている事実を認識し、初めて強く嫉妬したと、本人の言である。それを言わず、「萩持る」として、淋しさに抗い、鮮やかに毒気を抜いた。

「死なうかと囁かれしは螢の夜」と対にして觀賞すべき一句だと思う。

こぼれ萩大和やせし山ばかり

中 まり子

小原信子

掲句は奈良大会の折、奈良・深吉野吟行の作品かと。大和路は大小の寺があり仏像も数多く句のお仲間と有意義な吟行をさ

生きざるものに向けるやさしさ、暖かい眼差しに、この句集を手取る度に、もっとお話を聞きたかったと思つたのです。鴻の大会では、ざっくりとしたセーターを召しておられた姿を遠くから眺めていたことが思い出されます。

萩の葉は心の小舟か揺れやまず

折笠美秋

竹山一子

風のない病室に奥様の活けてくれた、儂い萩の葉が、人工呼吸器の管に反応して、揺れ続けているのは、自分が生きている証である。「心の小舟か」は、人生への諦念か、無念かを色々乗せた小舟だろう。

ALS（筋萎縮性側索硬化症）を患い、悲運を恨み、悲嘆にくれているわけではない。深い海のような静謐な時間に居る。思いがけぬほど晴朗な気分である、とも書いている。

体の自由のきかないのを、句を作ることで、思いを託す言葉を見つけて、奥様が書き写し、句集に残すことが出来たと、友人、知人、看護人に感謝しながら安らかに逝つた俳人。

涙なしでは読めなかつた句集を、長寿の俳人大塚さんが私に遺してくれました。感謝しています。すべて病室の中での俳句でしたが、淋しい萩の句の中、胸に迫りました。

〔折笠美秋「君なら蝶こ」より〕

れ「大和やさしき」と言う言葉が生まれたのが、そして山ばかりだなあーと感慨とも、疲れともとれる眩きような下五を微笑ましく思いました。中まり子さんに初めてお目にかかったのは、北海道にお戻りになる頃だったかと思う。新年句会で今は亡き、岡杜詩さんのお店で童謡を美しいソプラノで唄われて驚きました。後でお嬢様は声楽家でいらした事を知る。

北海道へ戻られても句への情熱を失わず悲しみを背負つても、抑制の利いた詠みの中にお嬢様への慈愛が溢れ、まり子さんのやわらかな眼差とも一致する句ばかりです。

（中まり子句集『帰雁』所収）

もとよりの風のふくらみ括り萩


後藤兼志

畑田久美子

後藤兼志全句集『風』の一陽来復の章に掲載の一句。この句に惹かれて、鑑賞は難しいと思いつつ、「もとよりの風のふくらみ」とは、萩は自由自在に枝を伸ばし、萩のトンネルに仕立てたり、小道に枝垂れてきたりと、それが秋風をしつかり捉えているのです。風ごと括られた萩は豊かで、作者自身も、その中に包まれているような安心を得られていたのでしょう。

一陽来復の章は平成二十三年から二十四年の作が纏められていて、若くして病いとの闘いに頑張っておられた時期と思えますと、もっと深い思いがあたりだったことでしょう。生きとし

荒川心星



## 桑の実

黒揚羽舞ふ日当りのよき窓辺  
あをあをと山あをあをと今年竹  
水の辺に蜻蛉の羽化始まりぬ  
いくたびも餌の戻る青葉山  
老鶯と瀬音の作るハーモニ―  
花蜜柑看護疲れを癒やしけり  
あり余るほどの日を享け梅筵  
桑の実をふふめば母と逢へさうな

頭だけ見ゆる鈴鹿嶺麦の秋

麦の秋山羊にロープの長さかな

更衣母と旅する夢を見て

美しきこの青梅を何にしやう

白靴の木洩れ日返す墳の道

楊梅熟る樹下をべたべた汚しては

墳山は猫の縄張梅雨ぐもり

湧き出でて草から草へ梅雨の蝶



## 麦の秋

半谷洋子

谷口摩耶



## 氷雨

底紅の咲き始めたる雨の朝  
梅雨の寺夫の仕事は塔婆書き  
挽ぎたての胡瓜とトマト賜りぬ  
季節限定甘夏のパフェほろ苦し  
向日葵や農家の棚の野菜買ふ  
この頃や苺を潰すことのなき  
遠き日の夢を見たくて籠枕  
氷雨降る首都高速を帰りけり

# ちよつとそつこまで

第28回

## 「向島・文学的記憶を歩く」 鈴木 崇



東武スカイツリーラインの隅田川橋梁横に「すみだリバーウォーク」と名付けられた歩道橋が新しくできた。浅草と東京スカイツリーを最短ルートで結び、これまで吾妻橋が言問橋を渡ってアクセスするしかなかった隅田公園にも気軽に足が運べるようになった。

東武の浅草駅からとうきょうスカイツリー駅間の高架下には「東京ミズマチ」なる複合商業施設が入り始めており、若者に人気の出そうな雰囲気のお店も多く、新たなにぎわいの創出が期待される。今回は隅田公園から向島方面を歩いてみる。

向島の俳人といえば富田木歩である。浅草を会場とする東京句会でもよく名の挙がる俳人。本所向島に生まれ、関東大震災の被害により亡くなった。幼くして両足の自由を失い、「境涯の俳人」として知られる。隅田公園には「富田木歩終焉の地」の史跡が建てられている。

夢に見れば死もなつかしや冬木風

富田木歩

この句は隅田公園からほど近くの神社境内に句碑がある。「亡き人々を夢に見て」との前置のある句だ。死の観念から己の生を照らす、なんとも寂しい句ではある。三囲神社には、数多くの歌碑、句碑、詩碑があり、趣深い境内なので、向島散策には是非立ち寄りた。

隅田川沿いの長命寺は「長命寺の桜餅」で有名である。例年、四月の東京句会では、守屋さん夫妻がこの桜餅を手配してくれて、句会の席で出してくれる。再度、東京句会のメンバーと共に味わえる日を願いつつ、隅田川のもとで買い食いをした。桜葉のしよっぱさと川風が身に沁みた。

ここから東向島の路地が多いエリアに分け入っていく。旧「鳩の街」という、東京大空襲のあとに玉の井から移転した業者が開業した赤線跡がある。タイトルの装飾や看板建築に当時の名残が今でも多少感じられる。

町歩きをすると、その土地のさまざまな歴史も見えてくるわけで、どこまで掘り起こしてもものやらとも思うのだが、鳩の街は吉行淳之介「原色の街」、玉の井は永井荷風『渥東奇譚』の舞台であり、私としては文学的記憶を実地で辿る散歩として歩いているつもりだ。

向島花街花の雨となる 鈴木崇

という句を作り、「鴻オンライン句会」に出した。「向島花街」に文学的記憶への思いを寄せてのロマン句のつもりである。この句に小林良作さんがこんなコメントを寄せてくれた。

『玉ノ井』『鳩の街』は我が悪童時代に駆けずり回った街。よく『うるさいわよ、大きくなったらお金をもって遊びにおいて』と姐さんに叱られた。

私にとっては文学的ファンタジーだが、良作少年はリアルタイムで町を体感していたわけである。こういうナマの一証言を聞く事ができてうれしかった。色街文学を読むだけでは分からないリアルな声である。

「その赤線も中学生の時に廃止になり行けず仕舞いに」とオチまでつけてくれるのが良作さんのサービス精神。そのまま縮めに使わせていただきます。

栗庵閑話 39  
 虫丸



<http://www.haisi.com/koh/index.htm>



# 羽音集

増成栗人 選



思 春 期 の 少 年 の 黙 青 嵐  
 ソーダ水優しき嘘を聞いてをり  
 尾鰭ふり金魚はいつも聞き上手  
 父の日や父より齡重ねぬて  
 源氏絵巻の美女の名負うて花菖蒲  
 髪型を変へて私の夏が来る  
 アカシアの花重たげな昼下り  
 シャンパンと夕焼入れるグラスかな  
 夏館マントルピースに置き時計  
 新涼や朝のルーティン一つ増え  
 鳩の子の右往左往の浮巢かな  
 時 鳥 東 大 植 物 園 の 黙  
 七月の森の静寂に雨の音  
 三步ほど前を大きな黒揚羽  
 凌霄に妖気といふがありにけり  
 夏の月マングローブが動き出す  
 ぷあぷあ海月宇宙を泳ぐかのやうに  
 初蟬や皆無言なる遍路道  
 隣家よりカノンのひびく梅雨晴間  
 五月晴髪をピンクに染めやうか

習志野 野村昌代

流山 中内敏夫

札幌 北城美佐

船橋 菊池ひろ子